

長岡京市文化財調査報告書

第 70 冊

2 0 1 7

長岡京市教育委員会

編集 公益財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター

序 文

私たちの長岡市は、豊かな水と緑に恵まれた良好な環境と大都市を結ぶ交通の利便性により発展してきたまちです。

古くは旧石器時代から人々が生活を営んだことがわかつており、特に 784 年に「長岡京」という当時のわが国の都が置かれた地として、全国的に知られています。

また、市内には史跡恵解山古墳をはじめとした首長墓や、勝龍寺城などの城館跡、乙訓寺・長岡天満宮といった神社仏閣など、数多くの文化遺産が点在し、現代に至るまで豊かな歴史と文化を守り育んできました。

しかし、こうした遺跡は、まちの発展の一方でかつての姿が失われつつあります。本市では、これらの遺跡の調査・保護に力を入れるとともに普及・啓発に努め、地域全体で風土や文化遺産を守るまちづくりを進めています。平成 28 年 3 月には、すでに国の史跡であった恵解山古墳に加え、井ノ内車塚古墳・井ノ内稻荷塚古墳・今里大塚古墳が「乙訓古墳群」を構成する首長墓として、新たに国の史跡に指定されました。今年度はこれらの史跡指定を記念してシンポジウムを開催し、盛況のうちに終えることができました。

さて、本報告書は、平成 28 年度に長岡市教育委員会が実施した井ノ内地区における発掘調査の成果をまとめたものです。井ノ内車塚古墳では、埋葬施設の構造が明らかとなりました。井ノ内稻荷塚古墳周辺では、土師質土器が多数埋納された土坑を確認し、中世の土地利用や、儀礼の一端を知ることのできる貴重な成果を得ました。

最後になりましたが、発掘調査にあたり数々のご助力をいただきました土地所有者や地元協力者の方々、ご指導・ご助言をいただいた諸先生方並びに調査を担当していただいた公益財団法人長岡市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。

本書が文化財保護の普及・啓発の一助となり、また地域学習の資料として広く活用いただければ幸いです。

平成 29 年 3 月

長岡市教育委員会

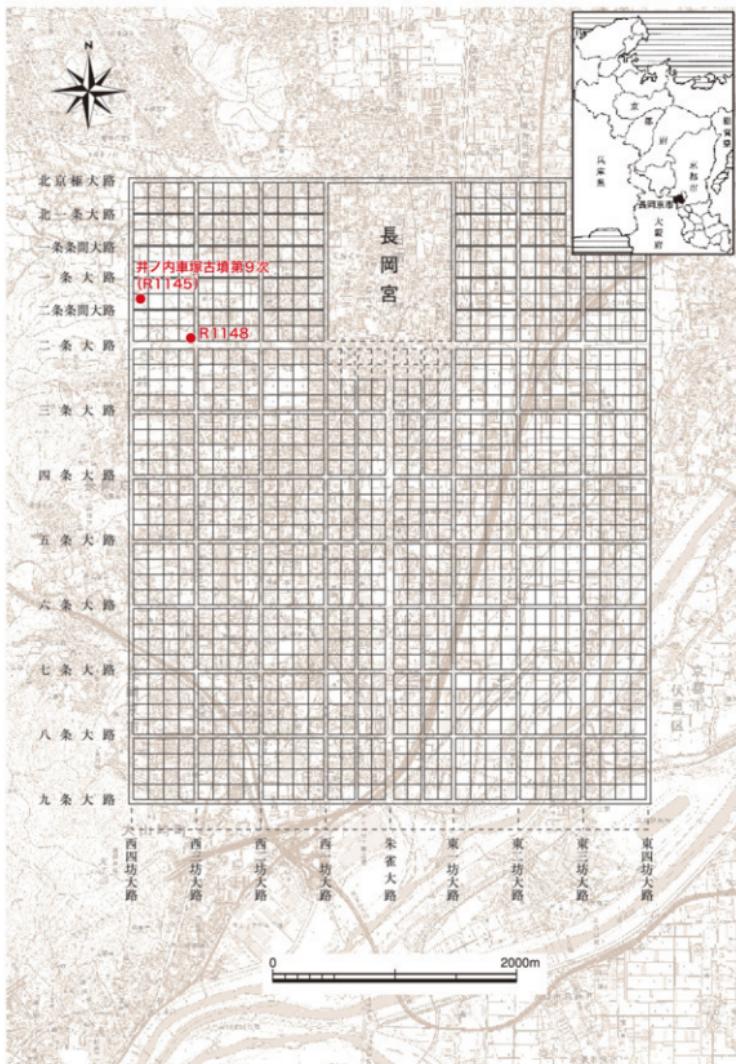
教育長　山　本　和　紀

凡　　例

1. 本書は、長岡京市教育委員会が平成28年度に国庫補助事業として公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに事業を委託して実施した発掘調査に関する概要報告である。
2. 調査対象地は、第1図および付表-1に表示した。
3. 長岡京跡の調査次数は、右京城と左京城に分けて通算したものである。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1977年)収録の旧大字小字名による地区割りと同地区内における調査回数を示す。
4. 長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号(1992年)の復原案に従った。
5. 本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」「長岡京市史」資料編一(1991年)によった。
6. 本文の(注)に示した長岡京に関係する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、「長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選」(七) 公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター(2016年)に従って略記した。
7. 本書において使用している遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数+番号であるが、煩雑さを避けるため、調査次数を省略している。「SD01」の場合、調査次数を冠した「SD ○○○○○ 01」が正式な番号である。
8. 本書で使用している方位と国土座標値は、旧座標系の第VI系によっている。
9. 本書の挿図の土層名で〈〉を付けて表示した記号は、「新版標準土色帳」(1997年版)のJIS表記法による土色名である。
10. 遺物写真は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に撮影を依頼した。
11. 本書は、第1章を公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの中島皆夫、第2章を長岡京市教育委員会の福家恭が執筆し、全体の編集は技術補佐員・整理員の協力のもと中島が行った。

付表-1 本書報告調査地一覧表

| 調査次数 | 地区名 | 所在地 | 現地調査期間 | 調査面積 | 備考 |
|------------------------------------|-----------|---------------|--------------------------------|-------------------|-----------------|
| 井ノ内車塚古墳 第9次 長岡京跡右京 第1145次 | 7ANGKT-10 | 長岡京市井ノ内向井芝4 | 2016年10月3日 ～ 2016年12月21日 | 53m ² | 井ノ内車塚古墳 |
| 長岡京跡右京 第1148次 | 7ANGKS-7 | 長岡京市井ノ内小西52番地 | 2016年11月7日 ～ 2016年12月1日 | 102m ² | 井ノ内輪荷塚古墳 隣接地 |



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

本文目次

第1章 井ノ内車塚古墳第9次調査概要

—長岡京跡右京第1145次(7ANGKT-10地区)調査—

| | |
|-------|----|
| 1はじめに | 1 |
| 2調査経過 | 2 |
| 3検出遺構 | 5 |
| 4出土遺物 | 10 |
| 5まとめ | 10 |

第2章 長岡京跡右京第1148次(7ANGKS-7地区)調査概要

| | |
|-------|----|
| 1はじめに | 11 |
| 2調査経過 | 12 |
| 3検出遺構 | 12 |
| 4出土遺物 | 18 |
| 5まとめ | 19 |

図 版 目 次

井ノ内車塚古墳第9次調査（長岡京跡右京第1145次調査）

- 図版1 調査地全景（南東から）
- 図版2 調査地全景（北西から）
- 図版3 (1) 横穴式石室玄室側壁の検出状況（北西から） (2) 横穴式石室玄室側壁の検出状況（北西から）
 (3) 横穴式石室玄室側壁の検出状況（南東から）
- 図版4 (1) 後円部の墳丘盛土（南から） (2) 後円部の墳丘盛土と玄室側壁（南西から）
- 図版5 (1) 玄室側壁と攪乱坑の堆積（南西から） (2) 玄室側壁と攪乱坑の堆積（西から）
 (3) 玄室側壁と攪乱坑の堆積（東から）
- 図版6 (1) 石室地業と墳丘盛土-1区（南から） (2) 石室地業と石材-2区（北から）
 (3) 石室地業と墳丘盛土-3区（南から） (4) 石室地業と墳丘盛土-4区（北から）
 (5) 墳丘盛土の状況-3区（西から） (6) 墳丘盛土の状況-4区（北から）

長岡京跡右京第1148次調査

- 図版7 調査地全景（東から）
- 図版8 (1) 調査区東半遺構検出状況（東から） (2) 調査区西半遺構検出状況（西から）
- 図版9 (1) 土師器皿群（土器埋納遺構 SX34） (2) 土師器皿群（土器埋納遺構 SX34）
 出土状況（南東から） 出土状況（東から）
- 図版10 (1) 土坑SK32・SX33検出状況（北から） (2) 土坑SX33南北断面堆積状況
 (西から)
- 図版11 (1) 土坑SK26（南から） (2) 小穴P30・土坑SK31（東から）
 (3) 調査区北東角の堆積状況（南西から）
- 図版12 (1) 土坑SK27（北から） (2) 小穴P7・8（南から）
 (3) 小穴P10（北から） (4) 小穴P11・12（西から）
 (5) 小穴P17（北から） (6) 小穴P19（北から）
- 図版13 土器埋納遺構SX34出土遺物
- 図版14 (1) 土器埋納遺構SX34出土遺物 (2) その他の出土遺物

挿 図 目 次

第 1 図 長岡京と調査地の位置 (1/40000) iii

井ノ内車塚古墳第9次調査（長岡京跡右京第 1145 次調査）

| | |
|---|---|
| 第 2 図 発掘調査地位置図 (1/5000) | 1 |
| 第 3 図 調査区配置図 (1/500) | 2 |
| 第 4 図 墳丘と調査区全体図 (1/200) | 3 |
| 第 5 図 作業風景 (北から) | 4 |
| 第 6 図 現地説明会風景 (北から) | 4 |
| 第 7 図 トレンチ埋め戻し風景 (南から) | 4 |
| 第 8 図 調査区検出遺構図 (1/50) | 7 |
| 第 9 図 横穴式石室玄室 奥壁・東側壁実測図 (1/20) | 8 |
| 第10図 井ノ内車塚古墳と井ノ内稻荷塚古墳の横穴式石室 (1/100) | 9 |

長岡京跡右京第 1148 次調査

| | |
|---|----|
| 第11図 発掘調査地位置図 (1/5000) | 11 |
| 第12図 調査区検出遺構図・土層図 (1/100) | 13 |
| 第13図 土器埋納遺構 SX34 遺物出土状況実測図 (1/10) | 14 |
| 第14図 土坑群実測図 (1/50) | 15 |
| 第15図 小穴土層図-1 (1/50) | 16 |
| 第16図 小穴土層図-2 (1/50) | 17 |
| 第17図 出土遺物実測図 (1/4) | 18 |
| 第18図 土器埋納遺構 SX34 出土土器分布図 | 19 |
| 第19図 井ノ内稻荷塚古墳の復原案 (1/800) | 20 |

付 表 目 次

| | |
|---------------------|----|
| 付表-1 本書報告調査地一覧表 | ii |
| 付表-2 井ノ内車塚古墳調査履歴一覧表 | 2 |
| 付表-3 報告書抄録 | 21 |

第1章 井ノ内車塚古墳第9次調査概要

—長岡京跡右京第1145次(7ANGKT-10地区)調査—

1 はじめに

- 1 本報告は、平成28(2016)年10月3日から12月21日まで、長岡京市井ノ内向井芝4において実施した、井ノ内車塚古墳第9次調査(長岡京跡右京第1145次調査)に関するものである。
- 2 調査は、国史跡乙訓古墳群の1基である、井ノ内車塚古墳の埋葬施設などを確認する目的で実施したもので、調査面積は約53m²を測る。
- 3 調査地は、長岡京跡の右京二条四坊十五町にもあたるため、長岡京に関わる遺構、遺物の確認も合わせて行った。
- 4 発掘調査は、平成28年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、現地調査は中島皆夫が担当した。
- 5 発掘調査にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺地権者の方々や関係機関に種々のご理解とご協力を賜った。
- 6 調査においては、都出比呂志氏(埋蔵文化財センター専門委員)を始め、専門の諸先生方からご指導を賜った。
- 7 本報告の編集と執筆は中島が行った。



第2図 発掘調査位置図(1/5000)

2 調査経過

井ノ内車塚古墳の概要（第3・4図、付表-2）

井ノ内車塚古墳では、3回の測量調査と6回の発掘調査が実施されている。平成27年度に実施した第8次調査までの成果から、これまでに確認されている井ノ内車塚古墳の概要を以下に列記する。

- ・後期の前方後円墳
- ・規 模 全長約39m、後円部の直径約24m、前方部長約17m・前方部幅約26m
くびれ部幅約17m、後円部高約3m、前方部高約2.5m（高さは現地表から）
- ・主 体 部 横穴式石室の可能性、過去に陶棺採集
- ・外 表 施 設 段築未確認、葺石なし、埴輪（埴輪列未確認）、後円部南西側に造り出し、周溝
- ・埴 輪 窯窯焼成、普通円筒埴輪（3条突帯4段）、朝顔形円筒埴輪
形象埴輪（家、蓋、盾、轎？、鞆？、巫女、鶏（雌雄）、馬、犬、石見型）
- ・土 器 土師器、須恵器（MT15～TK10型式）、韓式系土器

調査の目的

本調査は主に第8次調査3トレンチの成果を踏まえ、以下を主要な調査目的として実施した。

- ・後円部南東側における横穴式石室の有無と規模・構造などの確認
- ・後円部南東側擾乱坑の範囲確認
- ・古墳の築造方法に関する情報の収集



第3図 調査区配図図 (1/500)

付表-2 井ノ内車塚古墳調査履歴一覧表

（調査次数の下段は長岡京跡調査次数）

| 調査 次 数 | 調 査 年 度 | 後 円 部 | | | く び れ 部 | | | 前 方 部 | | |
|--------------|----------------------|-------------|--------|--------|------------------|--------|--------|-------------|--------|--------|
| | | 直 部 | 斜 面 | 裾 部 | 斜 面 | 裾 部 | 直 部 | 斜 面 | 裾 部 | 直 部 |
| 1 | 1967 S42 | 測量調査 | | | | | | | | |
| 2 | 1997 H9 | 測量調査 | | | | | | | | |
| 3 | 1999 R647 H11 | | | | | | | | | |
| 4 | 2011 R1028 H23 | | | | | | | | | |
| 5 | 2012 R1045 H24 | | | | | | | | | |
| 6 | 2013 R1068 H25 | | 造り出しか | | | | | | | |
| 7 | 2014 R1092 H26 | | 造り出し | | | | | | | |
| 8 | 2015 R1119 H27 | | | | 測量調査 | | | | | |
| 9 | 2016 R1145 H28 | 横穴式石室 | | | | | | | | |

Y = -27.900

Y = -27.880



第4図 墳丘と調査区全体図 (1/200)

調査経過（第5～7図）

平成27年度の第8次調査3トレンチでは、墳頂部より約4m下で完形に近い須恵器、そして、赤色顔料を確認し、初めて横穴式石室の存在を窺わせる資料が得られた。このため平成28年度に第9次調査を実施し、第8次調査3トレンチを中心にして方形の調査区を設け、石室の有無、石室が存在する場合にはその構造、規模を明らかにすることとなった。

本年度の調査では、まず10月3日から7日まで対象地全域における竹や樹木の伐採処分を実施した。竹樹木の伐採処分後にトレンチ設定作業を行い、10月11日から本格的な掘削作業に着手した。11月26日には現地説明会を開催し、約150名の参加者を得ることができた。また、現地説明会前後には諸先生方が来訪され、現地指導及び重要な教示を数多く頂いた。その後、5区の掘削と1・2区の部分的な拡張作業などを行い、記録作業がほぼ終了した12月12日から埋め戻しに着手した。機材撤去など全ての現地作業が終了したのは12月21日であった。

調査区の設定（第4・8図）

当初、第8次調査3トレンチと重複して北西から南東方向の長さ約7.5m、幅約5mの調査区を設けた。調査区のほぼ中央部に土層観察畦を設け、畦北西側の2区画を北から1・2区、そして南東側を北から3・4区とした。また、各区の中央部には補助的な畦を設定した。

調査では、まず第8次調査3トレンチとの重複部分を再掘削し、今年度新たに掘削した範囲では攪乱坑の輪郭確認作業を行った。しかし、攪乱坑の輪郭が当初想定した範囲より広がることが明らかとなつたため、1・2区の北西辺と4区の南東辺、2区南西隅を拡張した。また、調査期間の最終段階に5区を設け、漢道部の検出に努めた。



第5図 作業風景（北から）



第6図 現地説明会風景（北から）



第7図 トレンチ埋め戻し風景（南から）

3 検出遺構

搅乱坑（第4・8図） トレンチの1～4区で後円部の南東側に穿たれた搅乱坑の上場を検出した。1・2区では搅乱坑の北西端を確認するため北西辺を拡張したが、搅乱坑の輪郭はさらに北西側へ延びていた。このことから、搅乱坑は第8次調査4トレンチで検出した南東側への落ち込みまで続くことが分かった。1・3区では搅乱坑の北東辺を、2・4区では南西辺を確認することができた。搅乱坑の規模は北東から南北方向の幅が約4.5mで、その主軸は古墳表面の等高線から想定された主軸に比べ、西で北に振る方位を示す。

搅乱坑は垂直に近く掘削されており、最高所である墳頂部の南東側では深さが約3.5mに達している。後述する横穴式石室遺存石材の直上まで達しており、この搅乱坑が石室石材を抜き取るためのものであることは明らかである。搅乱坑の埋土は上部が砂礫が多く含む締まりの悪い弱粘質土であるが、遺存石材直上など下部では比較的締まった粘質土であった。搅乱坑の下部埋土では埴輪や土師器、須恵器とともに瓦質羽釜の破片が出土しており、石材抜き取り時期の一端を知ることができた。

墳丘盛土（図版4） 搅乱坑の壁面では墳頂部から石室下部までの墳丘盛土を観察した。墳丘盛土は茶灰色弱粘質土、砂礫を含む黄褐色弱粘質土、黄褐色粘質土、黒茶褐色粘質土などが小単位で互層となって積み上げられている。しかし、全体的に見れば、墳頂部から約1.5m下までが砂、砂礫を多く含む盛土であるのに対し、それより下は粘質土の良く締まった盛土で構成されていた。

石材抜き取り坑（第8・9図） 1・2区の搅乱坑壁面及び横穴式石室の石材検出過程において石材抜き取り坑と考えられる土の違いを多数確認した。搅乱坑壁面のものは墳丘盛土と異なる締まりの悪い土で、後述する裏込石が引き抜かれた跡と考えられる。石室石材の背後では黄褐色粘質土の墳丘盛土上面に長軸0.3～0.5m程度の窪みが認められる。この窪みもその位置から裏込石の抜き取りに伴うものと考えた。一方、3・4区では黒茶褐色粘質土の上面で黄褐色ないし茶褐色粘質土が斑状に入る不整形な窪みが認められる。

横穴式石室

本調査では1区中央部において、原位置を保つ石材を検出した。墳丘盛土や搅乱坑との関係から、これらが横穴式石室の玄室奥壁及び東側壁の石材と判断した。

玄室（第8図、図版3） 玄室の奥壁は、北東隅で僅かに破碎された石材を検出しただけであり、壁体の大部分が基部まで抜き取られている。破碎石材は短辺0.25m程度であるが、玄室北東隅と考えられる斜め方向に据えられた石材および後述する裏込石の抜き取り坑などから原位置を保つものと考えた。

東側壁は、奥壁の北東隅から南へ約2.5mにわたって検出した。石材は長辺0.4mまでのもので、大半の石材が長辺を玄室内に向けて据えられていた。掘削範囲が限られているため明らかにできなかつたが、これらの石材は石室壁体の基底を構成するものと考えられる。

玄室の主軸は、東側壁の方向から真北に対して約20°西へ振る方位と考える。また、玄室床面の高さは第8次調査の成果から赤色顔料・須恵器を検出した標高47.5m前後に求められ、確認した玄室石材より約0.4m下に想定できる。

玄室の西側壁が想定される2区では、裏込石と考えられる石材を1石確認しただけで、壁体の石材は全く残されていなかった。裏込石の周辺では攪乱坑埋土に矩形状の土色の違いが認められた。玄門付近の石材については、推定される範囲で確認に努めたが、石材はもとより痕跡も検出できなかつた。後世の攪乱によって悉く抜き取られたと考えられる。玄室床面も石材の抜き取りに伴つて大きく失われたと考えられるが、その範囲は明らかにできなかつた。

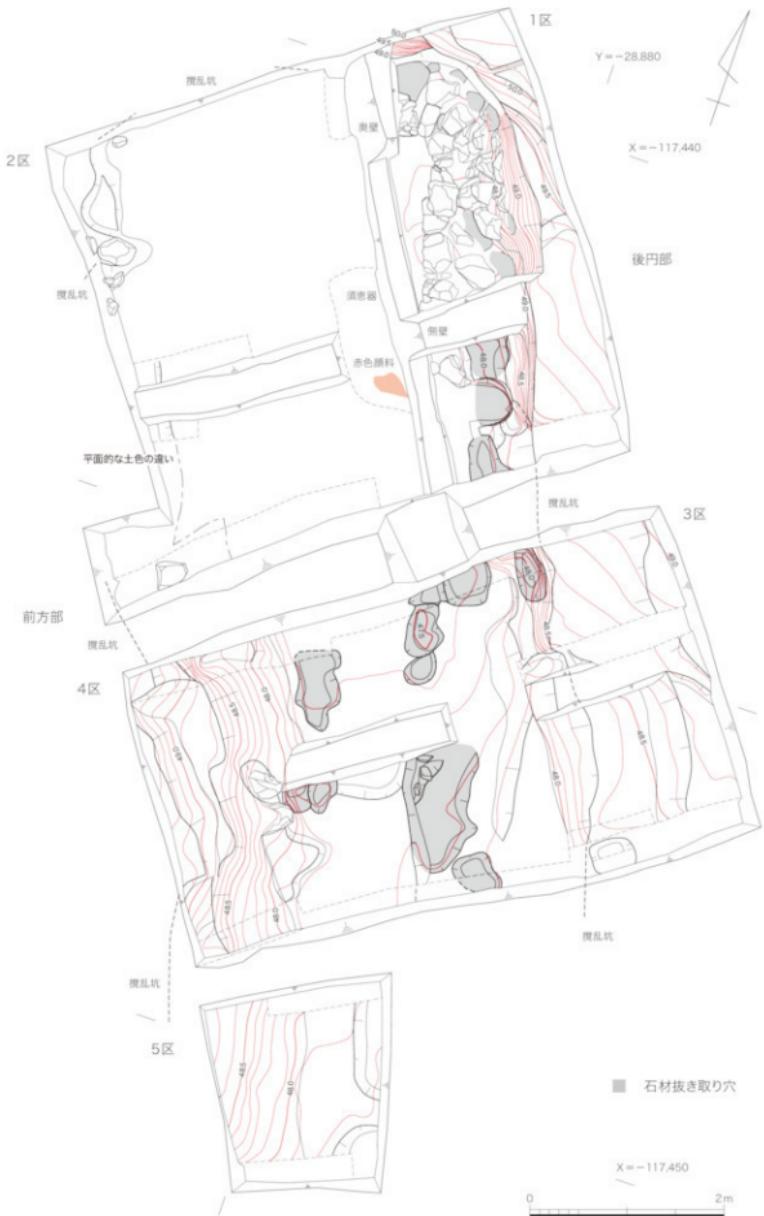
羨道(第8図) 玄室玄門の位置が明らかでないため、羨道の起点についても定かでない。また、羨道側壁が推定される範囲では原位置を保つ石材がほとんど無く、僅かに4区中央部において墳丘盛土に覆われた状態の石材を2石確認しただけである。

羨道が推定される3・4区では攪乱坑の底面に黒茶褐色粘質土が現れる。攪乱坑底面では浅く不整形な窪みを多数検出した。窪みの範囲は攪乱坑斜面の裾である東西両側に偏在しており、さらに東側の窪みが玄室東側壁の延長線上にある。窪みが羨道側壁石材の抜き取り痕跡であれば、その間の黒茶褐色粘質土の平坦面を幅1m程度の羨道に想定できる。黒茶褐色粘質土の平坦面の高さは北西端が約47.6mで推定される玄室床面に近い。4区の中央部から南側では緩やかな傾斜をなし、南端では高さ約47.8mを測る。なお、4区で確認された石材は配置状況から裏込石と考えられる。

本調査の最終段階では4区の南東に5区を設定し羨道に関する情報の確認に努めた。期待された羨道西側壁や閉塞に関する成果は得られなかつたが、4区から続く攪乱坑斜面と平坦面を確認した。第4次調査2トレンチでは47.6m前後に平坦面が確認されている。5区平坦面の高さは47.8m前後であり、南東隅には0.2m前後の落ち込みが認められることから、第4次調査2トレンチの平坦面が削平によるものと再確認できた。

以上のように、本調査では井ノ内車塚古墳の主体部である横穴式石室を確認することができた。しかし、想定以上に後世の攪乱によって石材が失われており、横穴式石室の平面形態や規模を明らかにできなかつた。ただ、前述した黒茶褐色粘質土の平坦面を羨道と仮定すれば、玄室西側壁が推定される2区における攪乱坑の広がりや土色の違いとともに、井ノ内車塚古墳の横穴式石室は芝古墳、井ノ内稻荷塚古墳と同様の右片袖式と考えることができる。また、横穴式石室の規模は、玄室の長さ約4m、幅約2m、羨道の幅約1mと推定した。

裏込石(第9図) 玄室の奥壁から東側壁では、壁面石材の外側で裏込石と考えられる石材と石材抜き取り坑を多数確認した。裏込石は長辺0.5mを超えるものがあり、壁面より大柄な石材が小口を内側に向けて据えられていた。裏込石は上下2群に大別される。下位の裏込石は黄褐色粘質土に覆われ、側壁石材に合わせてほぼ水平に据えられていた。一方、上位の裏込石は下位より0.5m程度高い位置にあり、墳丘盛土の茶褐色粘質土に覆われていた。その平面位置は下位より後方にあり外傾して据えられている。



第8図 調査区検出遺構図 (1/50)



第9図 横穴式石室玄室 奥壁・東側壁実測図 (1/20)

石室の構築（第9図、図版6） 横穴式石室は多くの石材が失われていたが、一方で首長墓における横穴式石室構築手法の一端を明らかにできた。井ノ内車塚古墳の横穴式石室は黒茶褐色粘質土の地山から構築されている。玄室では東側壁の壁面より約1.2m外側から黒茶褐色粘質土が0.2m程度掘り下げられていた。掘り込みの中には茶褐色粘質土が充填され、そして、茶褐色粘質土の上に黄褐色粘質土が施され側壁の石材および裏込石が据えられている。この掘り込みと粘土の充填、そして裏込石の利用は石室基底を安定させるための地業といえる。

基底より上の裏込石は外傾して据えられている。壁面石材の内側への微動を防ぎ安定させるためのものと考えられ、石室の構築に伴って段階的に施されたと考えられる。裏込石、石材抜き取り坑と埴丘盛土の関係から、石室の構築に従って埴丘盛土が施されたことが分かる。

壁面で裏込石、抜き取り坑が確認できるのは石室基底から約1.2mの高さまでであり、この

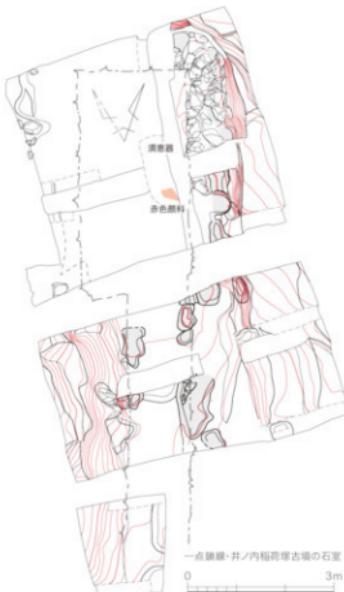
間の埴丘盛土は粘性が強く締まりの良い土であった。一方、埴頂部までの盛土に砂礫が多く含まれることから、埴丘盛土の下半に施された数種類の粘質土が石室構築に伴う土と考えられる。

石室の比較（第10図） 第10図には井ノ内車塚古墳の玄室北東隅を基点として、井ノ内船荷塚古墳の横穴式石室平面プランを同一縮尺で掲載した。本調査の成果が充分でないため踏み込んだ検討はできないが、石材抜き取り坑の位置などから井ノ内船荷塚古墳に比べ、より小規模な石室に復元するのが妥当であろう。

石室の使用石材 井ノ内車塚古墳の横穴式石室石材調査については、平成28年12月9日に橋本清一氏（元京都府立山城郷土資料館）が実施した内容を報告する。

本石室の岩石名には、頁岩～粘板岩・砂岩・チャート・花崗岩質アブライト・緑色岩類（シャーレスタイル）が見られる。これらの岩石は、古墳西方の西山山地を造る約2億年前の堆積岩類を中心とする丹波帯の岩石である。これらの内、花崗岩質アブライトと緑色岩類が目立っており、現在の小畑川支流である善峯川の疊層構成とよく似ている。

岩石の円磨度は岩石種毎に若干異なるが、一般的には0.3～0.6程度のものが見られ、0.4程度のものが最も多く、0.3及び0.5～0.6は少なくなる。このような円磨度の分布は小畑川本流と異なり、特に支流河川としての善峯川の特徴が顕著である。



第10図 井ノ内車塚古墳と井ノ内船荷塚古墳の横穴式石室 (1/100)

風化度については、チャートは全て新鮮であるが、砂岩・頁岩～粘板岩等は新鮮・弱風化のものがほとんどで中風化は見られない。

これらのことから多くの石材は、本古墳直下の段丘礫層よりも、むしろ当時の善峯川流域から採取したと考えるのが合理的である。橋本清一氏による井ノ内車塚古墳と芝古墳の調査結果から、井ノ内車塚古墳を含む3古墳の横穴式石室の石材は当時の善峯川から採取し、運搬されたと考えられる。なお、少量であるが、古墳直下の段丘礫層からも採取し利用されたと考えられる。

4 出土遺物

第8次調査3トレンチ北西隅では、須恵器片が比較的まとまった状態で出土した。須恵器には杯蓋・蓋付壺・器台・甕があり、杯蓋は陶邑窯TK10型式の特徴を備える。また、須恵器出土位置より約0.15m下では赤色顔料と考えられる土を確認した（第8・9図）。

本調査でも副葬品と考えられる須恵器が数点出土しているが、昨年度出土遺物を含め原位置を保つものはない。いずれも東側壁沿いへ二次的に移動されたものであろう。また、摸乱坑埋土からは2区の南東部でガラス製管玉1点、1・2区北側などで人骨片が数点が出土している。なお、本調査では古墳時代～近世の遺物が整理箱にして7箱分出土した。

5 まとめ

井ノ内車塚古墳では、墳形や規模、造り出し、盛土の状況、そして、多彩な形象埴輪の存在が明らかとなっている。本調査では、以下のような成果を新たに収めることができた。

- ① 主体部の横穴式石室を検出した。
- ② 横穴式石室の平面形態は芝古墳・井ノ内車塚古墳と同じ右片袖式と考えられる。
- ③ 横穴式石室の規模は井ノ内車塚古墳より小規模であると推定できた。
- ④ 横穴式石室の基底に施された地業の状況を明らかにした。
- ⑤ 墳丘盛土と横穴式石室構築の一端を明らかにした。

横穴式石室の存在を確認できたことで、芝古墳・井ノ内車塚古墳・井ノ内車塚古墳という首長墓系譜がより明らかとなった。また、横穴式石室、墳丘盛土の構築に関わる成果は、調査自体が困難な古墳築造技術の一端を明らかにするものとして注目できる。

注1) 清家 章「井ノ内車塚古墳第3次調査概要」『長岡京市報告書』第41冊 2000年

2) 山本輝雄「井ノ内車塚古墳第4次調査概要」『長岡京市報告書』第61冊 2012年

3) 山本輝雄「井ノ内車塚古墳第5次調査概要」『長岡京市報告書』第64冊 2013年

4) 山本輝雄「井ノ内車塚古墳第6次調査概要」『長岡京市報告書』第66冊 2014年

5) 中島浩夫「井ノ内車塚古墳第7次調査概要」『長岡京市報告書』第68冊 2015年

6) 中島浩夫「井ノ内車塚古墳第8次調査概要」『長岡京市報告書』第69冊 2016年

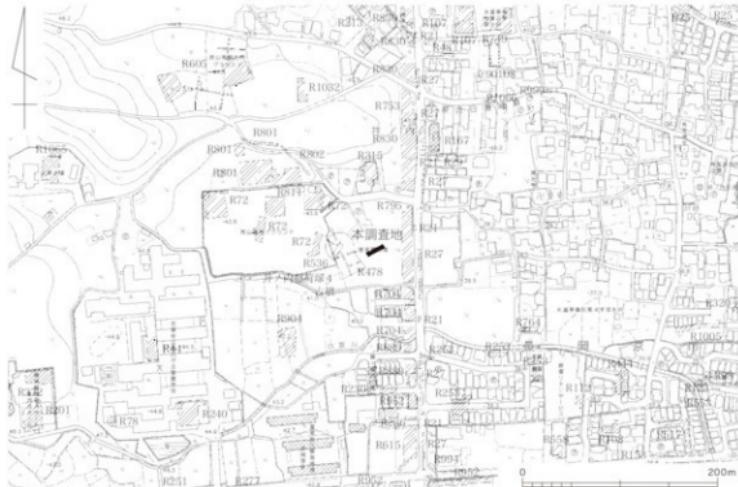
7) 橋本誠一「横穴式石室の使用石材」『長岡京市における後期古墳の調査』『長岡京市報告書』長岡京市教育委員会 第44冊 2002年

8) 熊井亮介「芝古墳」『京都市内遺跡発掘調査報告』京都市文化市民局 平成27年度 2016年

第2章 長岡京跡右京第1148次(7ANGKS-7地区)調査概要 —長岡京跡右京二条四坊四町、井ノ内古墳群、井ノ内遺跡—

1 はじめに

- 1 本調査は、平成28(2016)年11月7日～12月1日まで、長岡京市井ノ内小西52番、53番1において実施した長岡京跡・井ノ内古墳群・井ノ内遺跡に関する調査概要である。
- 2 当調査は、国指定史跡乙訓古墳群・井ノ内稻荷塚古墳の隣接する井ノ内古墳群内に位置し、遺跡保護に資する資料を得るために実施した。調査面積は約102m²であった。
- 3 調査地は、長岡京右京二条四坊四町の推定地や繩文～江戸時代にかけての複合遺跡である井ノ内遺跡にも重複しているため、これらに關わる構造・遺物の確認も合わせて行った。
- 4 発掘調査は、平成28年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた公益財團法人長岡市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は公益財團法人長岡市埋蔵文化財センター山本輝雄が行つた。
- 5 発掘調査にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺地権者の方々や関係機関に種々のご理解とご協力を賜った。
- 6 調査においては、都出比呂志氏(埋蔵文化財センター専門委員)を始め、専門の諸先生方からご指導を賜つた。
- 7 本報告の編集と執筆は福家恭(長岡京市教育委員会)が行つた。



2 調査経過

調査地は、小畠川右岸の善峰川により形成された沖積地南側、西山丘陵から派生した標高約40 m前後の低位段丘上に立地する。南側には、蛇行しながら小畠川に注ぐ坂川があり、基本的には西から東へゆるやかに傾斜した東西に長い段丘を形成している。

調査地周辺では、府道大山崎大枝線の拡幅工事に伴う長岡京跡右京第795次発掘調査で古墳時代の掘立柱建物や溝、長岡京期の柱穴や平安時代の溝や整地の痕跡、井ノ内館跡に関係する区画溝などが確認されている。⁽¹⁾また、乙訓古墳群の首長墓に位置付けられる井ノ内稻荷塚古墳や井ノ内車塚古墳などの周辺では、小規模な円墳や方墳、木棺墓などが見つかっており、墳墓形態の違いによる古墳の階層差が指摘されている地域でもある。⁽²⁾特に隣接する井ノ内稻荷塚古墳は、6世紀前半の横穴式石室をもつ前方後円墳であり、周囲には周溝状の溝が巡る可能性も指摘されている。

今回の調査では、長岡京期の遺構をはじめ、井ノ内稻荷塚古墳に関連する遺構、或いは井ノ内古墳群や井ノ内遺跡の一端が検出される可能性があった。

現地調査は、平成28年11月7日から実施した。11月29日に関係者説明会を開催し、翌30日から埋め戻し作業を行った。機材撤去等全ての作業が終了したのは、12月1日であった。

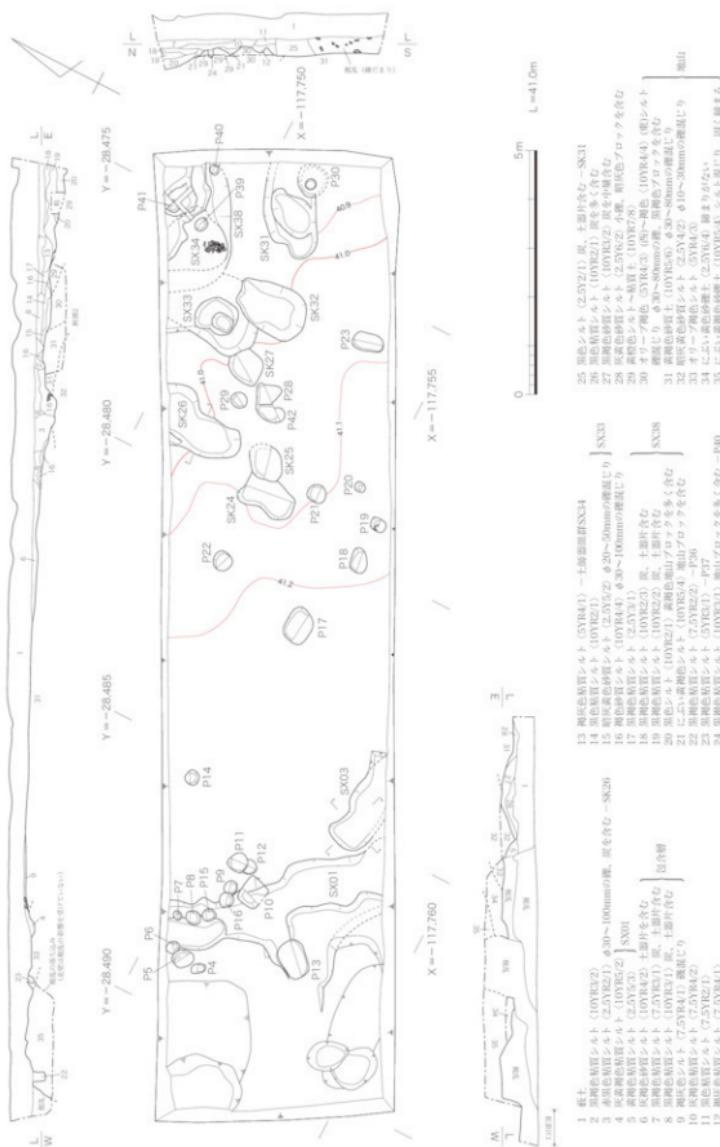
3 検出遺構

基本層序（第12図） 基本層序は元々が竹林であったことから、表層から0.5～0.6mは藪土であり、段丘礎とみられる褐色砂礫層～黄褐色粘質土（地山）まで削りこまれている。基本的に地形が西から東へ傾斜しており、東半には藪土の下層に中世の遺物を含む灰褐色～黒褐色粘質シルトの包含層が広がる状況であった。

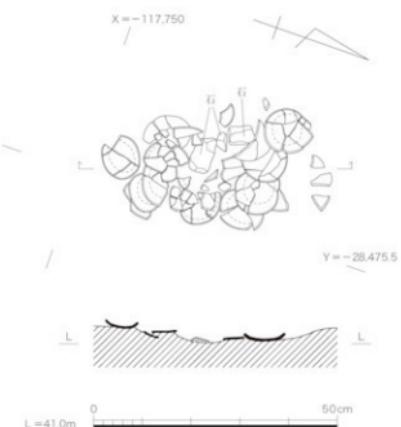
土器埋納遺構 SX34（第13・14図） 調査区東半に広がる中世遺物を含む包含層の下層に土師器皿が集中する状況を確認した。土師器皿群に伴う遺構は、それに切り合う北方向への落ち込みと埋土が似似し検出が困難な状況であったが、土層観察などから南北約1.4m、東西約1.4m、深さ0.17mの規模をもつ、不正形な円形状の土坑であると判明した。土師器皿は、15個体分が重なり合って広がっており、重なりの状況から数枚の皿を重ねて埋納したものが倒れたものと推測される。また、土師器皿群は、ごく浅い土坑の上半に集中しており、残存していたもの以外にも土師器皿や瓦器碗などが一括投棄されていたと考えられる。

土坑群（第14図） 調査区の東半を中心にSK24～26・31・32、SX03・33・34・38などの平面形状が長楕円形の土坑群が検出された。このうち、中世遺物を含む包含層の上層と下層に土坑群をわけることができる。

包含層の上層にあたるSK26・31、SX03は竹藪の客土により掘り込み面は不明であるが、長楕円形や炭を多く含む点などの共通点が多い。それぞれ時期は不明であるが、特にSK31は東西2.0m以上、南北1.1m、深さ0.32mの規模で炭や土器片を含む褐灰色～黒色シルトで一氣



第12図 調査区検出遺構図・土層図(1/100)



第13図 土器埋納遺構 SX34 遺物出土状況実測図（1/10）

検出面からの深さは最大で 0.5 m であった。

一方、SX38 は東西 2.7 m 以上、南北 1.6 m 以上、上層は方形に近い平面プラン、下層はトレンチの北角に向けて傾斜する形状である。また土器埋納遺構である SX34 や小穴 P41 はこの上層上面から掘削されている。この SX38 の上層掘方や SK31 はトレンチに並行しているが、その他の土坑群は正方位に近い方位で、南北方向を長軸とする SK26・32、SX33、東西方向の SX03 と SX38 の下層で構成される。また、SK24・25・27などの小規模な土坑も同様の方位である。

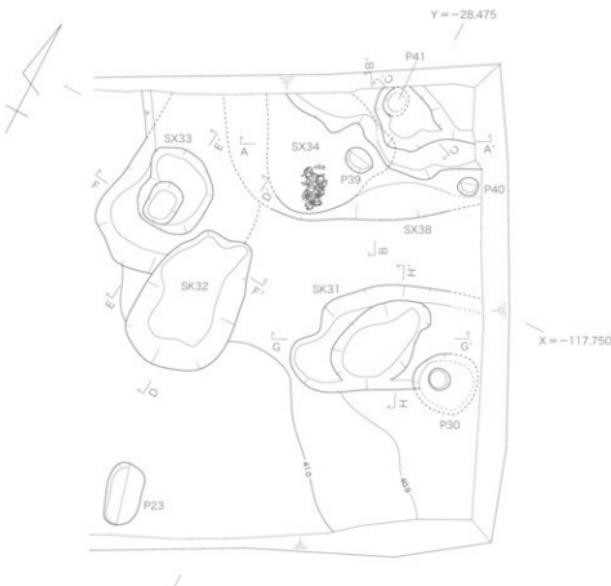
今回見つかった土坑群は、若干の差があったとしても基本的な規格はほぼ同じであり、埋土も褐灰色～黒褐色の粘質シルトでほとんど差がみられない。中世遺物を含む包含層の上層と下層、それぞれの切り合いなどに時期差を窺うことはできるが、概ね同じような時期に掘削されたものと想定される。

小穴群（第12・15・16図） 調査区の西半と東半にまとまりがみられる。検出された小穴群の多くは 0.2 ~ 0.7 m の円形ピットであるが、P10 と P17 のように平面プランが隅丸方形で、方位も正方位に近いものもみられる。また、P11 はピット内に 20cm 程度の石材が据えられ、礎石建物の存在を窺わせる。

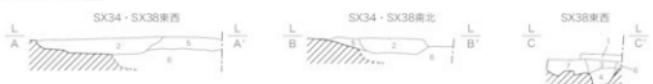
しかし、いずれのピットも規模や深度等に様々なものがあり、建物を復元することは難しい。遺物も希薄であり、時期の特定は困難であるが、調査区内の出土遺物から中世～古墳時代までのものが混在していると考えられる。

に埋められ、その上面から径約 0.6 m、深さ 0.3 m の小穴 P30 が掘られている。

その他の土坑は、中世遺物を含む包含層の下層にあたる。SK32、SX33・34・38 は折り重なり、切り合ひ関係が確認できる。北壁の土層の状況から SX33 → SX38 → SX34 の順番の掘削である。また、SK32 は、東西 1 m、南北 2.1 m の長楕円形を呈し、南北断面の状況から SX33・38 の上面から掘られている。SX33 は、東西 1.4 m、南北 2 m 以上の南北に長い楕円形で、検出された部分の中程が一段深くなり、



SX34・SX38断面



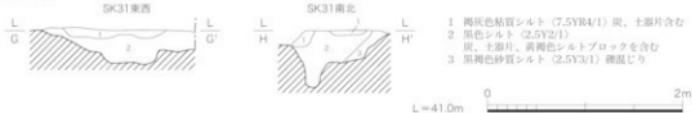
- | | |
|------------------------------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色粘質シルト (10YR2/2) 岩、土器片含む | 5 黒褐色粘質シルト (2.5Y3/1) 岩、土器片。縫を含む |
| 2 極灰色粘質シルト (5YR4/1) -SX34 | 6 黒色シルト (10YR2/1) 黄褐色地山ブロックを多く含む |
| 3 灰褐色粘質シルト (10YR4/2) } P41 | 7 黒色シルト (10YR2/1) 黄褐色地山ブロックの比率が非常に高い。 |
- SX38

SK32・SX33断面

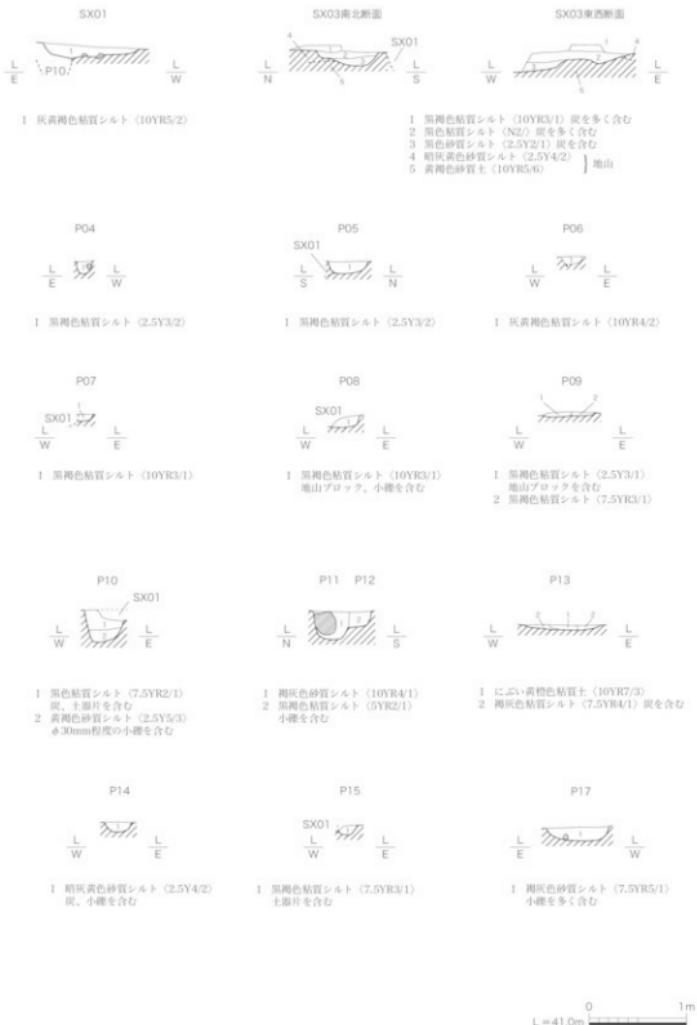


- | | |
|-------------------------------------|------------------------------------|
| 1 黒褐色砂質シルト (5YR3/1) 岩、土器片含む | 4 黒褐色砂質シルト (10YR3/1) 小塊、土器片を含む |
| 2 黒色粘質シルト (10YR2/1) 岩、土器片を含む } SK32 | 5 灰褐色砂質シルト (10YR4/2) φ20~50mmの縫混じり |
| 3 黑褐色粘質シルト (2.5Y3/1) -SX38 | 6 斜褐色粘質シルト (10YR3/3) 黄褐色ブロックを含む |
| | 7 オリーブ褐色シルト (2.5Y4/3) 縫混じり |
- SX33

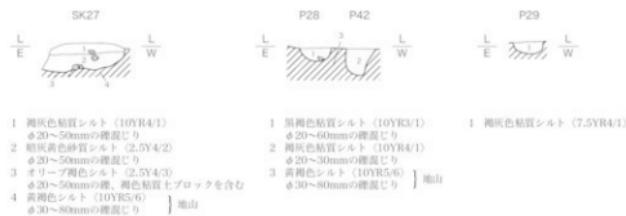
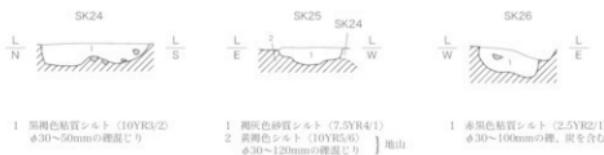
SK31断面



第14図 土坑群実測図 (1/50)



第15図 小穴土層図-1 (1/50)



L = 41.0m 1m

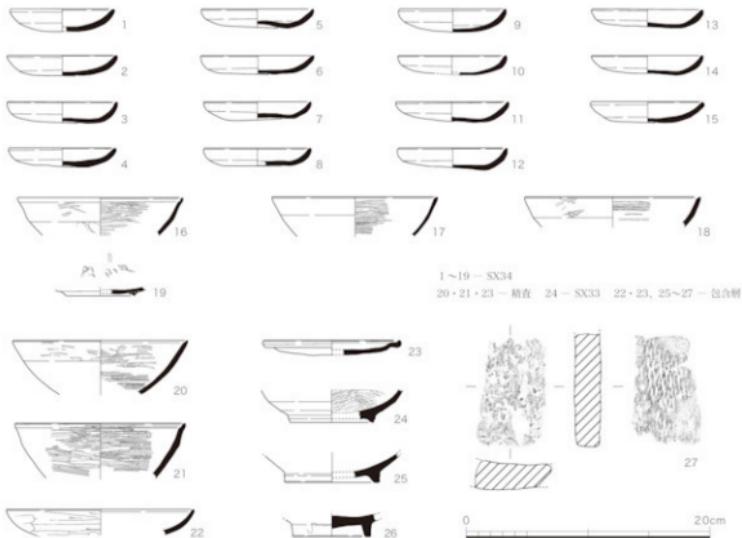
第16図 小穴土層図-2 (1/50)

4 出土遺物

今回の発掘調査では、整理箱2箱分の遺物が出土した。主な遺物は、土師器、須恵器、縁釉陶器、白磁、黒色土器、瓦器、瓦などである。多くは細片であり、そのうち実測可能であった27点について報告する（第17図）。

土器埋納遺構 SX34 土師器皿が18個体以上がまとめて出土し、埋土には瓦器椀も8個体以上が含まれていた。その内、実測可能であったのは土師器皿15点、瓦器椀4点であった。土師器皿は口径8.6～9.3cm、器高1.5～1.9cmのものがみられ、口径を9cm前後の規格で製作している。いずれも手捏ねで成形し、口縁部をヨコナデする。1・2は口縁端部を丸くおさめる形状、15は口縁端部に面をつくって断面三角形状を呈し、3～14は口縁上部～端部を立ち上げ、口縁端部を単に丸く表現するもの（3・4）と、断面が三角形状のもの（5～14）がある。また、個体によって若干のバラつきがあり、底部成形に3～8のような底部中央付近をやや押し上げたものもある。色調はにぶい黄褐色で、軟質な焼成である。灯明皿にみられる煤などは付着していない。

瓦器椀は口縁から胴部までの細片と底部が残るもので、16・17は口径13.6cm、18は口径14.4cm、19は底径5.4cmである。16～18は口縁部を外反させ、口縁端部～内面に沈線を巡らせて段を設けた形状である。外面は口縁部に限ってヘラミガキのちヨコナデ、内面は全体にへ



第17図 出土遺物実測図（1/4）

ラミガキ調整が施される。19は断面三角形の高台を貼り付けた底部で、外面と見込みをヘラミガキで調整している。これらの土師器皿と瓦器柄を縦軸口径分布グラフに当てはめてみたところ(第18図)、土師器皿は口径8.8~9.2cmに分布が集中する傾向がみられ、瓦器もおよそ14cm前後に分布することから、13世紀頃に位置付けられる。

※1 ●は、口径復元が可能な個体1点
※2 ()内の数字は、(口径復元が可能な個体 / 出土全個数)

第18図 土器埋納遺構SX34出土土器分布図

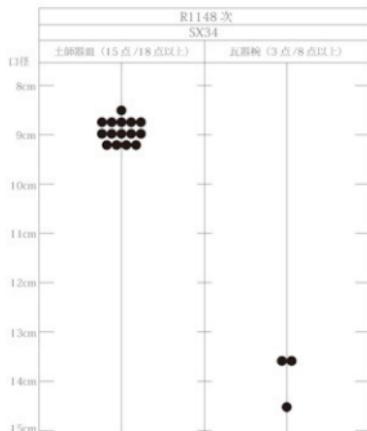
これらの出土遺物は、20は中世、21・23～26は平安時代、22・27は長岡京期に位置付けられる。なお、これらの遺物以外にも須恵器の胴部片や縁鉢陶器片などが出土している。

今回の調査地では遺構に伴う遺物が希薄な状況であったが、包含層には瓦器をはじめとした中世遺物に混じて、平安～古墳時代の土器が出土する状況であった。

5 まとめ

今回の調査地は、井ノ内稲荷塚古墳に隣接し、古墳に関わる遺構が検出される可能性があったが、明確な遺構は確認できなかった。また、これまでの発掘調査で墳丘北側の周溝状の落ち込みや墳丘の基底ラインが標高41 m前後に地山を削り込んで捕えることがわかっている⁽⁴⁾。今回の調査も古墳に向けての落ち込み等を想定して調査を行ったが、中世以降に一部削平を受けているものの西端で標高約41.4 m、東端で標高約40.5 mであり、西への落ち込みはみられなかった。

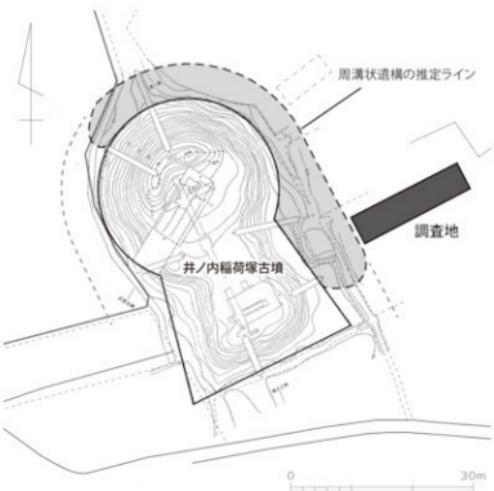
しかし、クビレ部第2トレチで推定されている埴丘基底ライン（標高41.1～41.2m）より、東側に0.4m前後地山の落ち込みがあり、元々の地形が西から東へ傾斜することを考慮すれば、古墳と調査地の間が深い溝状の落ち込みになることが推定される。ただし、埴丘の北側・西



第 18 圖 土器標號遺構 SX34 出土土器分布圖

問3 () 内の数字は、(口絆復元が可能な個体 / 出生会個数)

单击“下一步(向导)”按钮，进入“选择安装位置”对话框。



第19図 井ノ内稲荷塚古墳の復原案（1/800）

を数例確認できる。また、調査地の東に隣接する右京第795次調査では、10世紀後半の土師器皿と黒色土器碗を一括投棄した土坑が見つかっており、時期は異なるものの土器組成が類似することから、おそらく同様の性格の遺構であろう。この付近は近世以降の井ノ内村の村境にあたり、村境で執り行われた地鎮、或いは現在も稻荷社が祀られているツカ（井ノ内稲荷塚古墳）へのマツリなどが、10～13世紀頃に執り行われた可能性が想定される。

以上のように、当地は井ノ内稲荷塚古墳を保護する上では影響が少ない土地と考えられる。しかし、中世～古墳時代の遺構は同敷地内に広がっている可能性が極めて高いことから、これらの遺構群も保護できるようにご理解とご協力をいただいた。

側の一部以外で明確に周溝を確認できていない。また地形的には南側へも低くなっていることから、同一のグループである芝古墳や井ノ内車塚古墳のように丘陵の高い部分を中心削り出して墳丘を成形⁽⁶⁾し、周溝は全周しない可能性が高いのではないだろうか。

次に、土器埋納遺構SX34は、13世紀頃に何らかの祭祀等で使用した土器を一括投棄したものと推定される。その構成は土師器皿と瓦器碗为主体であり、長岡市内では13～14世紀前半の同様の遺構

注1) 増田孝彦「長岡京跡右京第795次（7ANGKS-6地区）・井ノ内跡発掘調査概要」『京都府センター概報』第113冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2005年

2) 杉井 健「井ノ内稲荷塚古墳の調査成果」『長岡京市における後期古墳の調査』『長岡京市報告書』長岡京市教育委員会 第44冊 2002年

3) 小森俊寛『京から出土する土器の編年研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀－』京都編集工房 2005年

4) 注2と同じ

5) 墳丘の西側は右京第72次調査（未報告）において、井ノ内稲荷塚古墳の周溝に推定される落ち込みが検出されている。落ち込みは深さ0.3m前後で、北側のものとほぼ同じ標高である。出土遺物からTK200形式間に埋没したものと推定される。

6) 中島信夫「井ノ内車塚古墳第8次調査概要・長岡京跡右京第1119次（7ANGKT-9地区）調査」『長岡京市報告書』第69冊 長岡京市教育委員会 2016年

7) 注1と同じ

付表-3 報告書抄録

| | |
|--------|----------------------------------|
| ふりがな | ながおかきょうしぶんかざいちょうさはうこくしょ |
| 書名 | 長岡京市文化財調査報告書 |
| 翻書名 | |
| シリーズ名 | 長岡京市文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第70冊 |
| 編著者名 | 中島博夫、福家恭 |
| 編集機関 | 公益財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒 617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の1 |

| 所取遺跡名 | 所在地 | コード 市町村 | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|------------|------|------------|------------|---------------------------|-------------------|----------|
| 井ノ内車塚古墳 ながおかきょうしぶんかざいちょうさはうこくしょ 長岡京跡 | 長岡京市 ながおかきょうしぶんかざいちょうさはうこくしょ 井ノ内向井坂 4 | 26209 | 2 | 34°56'26"' | 135°41'01" | 20161003 ＼ 20161221 | 53m ² | 確認 調査 |
| | | | 107 | | | | | |
| 井ノ内遺跡 ながおかきょうしぶんかざいちょうさはうこくしょ 井ノ内古墳群 ながおかきょうしぶんかざいちょうさはうこくしょ 長岡京跡 | 長岡京市井ノ内 おにじ 小西 52 番地 | 26209 | 015 | 34°56'17"' | 135°41'17" | 20161107 ＼ 20161201 | 102m ² | 確認 調査 |
| | | | 009 | | | | | |
| | | | 107 | | | | | |

| 遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---------------------------------------|-----------|------|------------------------|--|---------------------------------|
| 井ノ内車塚古墳 長岡京跡 (右京第1145次) | 古墳 | 古墳時代 | 後円部の横穴式石室、石室下部の地業、埴丘盛土 | 埴輪、須恵器、ガラス製管玉、人骨片 土師器、瓦器、陶磁器 土師器、須恵器 | 井ノ内車塚古墳の第9次調査。後円部の南東側で横穴式石室を確認。 |
| 井ノ内遺跡 井ノ内古墳群 長岡京跡 (右京第1148次) | 集落 古墳群 | 平安時代 | 溝、土坑群、小穴群 | 土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、黒色土器 土師器、須恵器 | 中世の土器埋納遺構 |
| | 都城 | | 小穴 | 土師器、須恵器、瓦 | |

※緯度、経度の測点は調査区の中心で、国土座標の旧座標系を使用している。

図 版

井ノ内車塚古墳第9次（長岡京跡右京第1145次）調査

図版一



調査地全景（南東から）

井ノ内車塚古墳第9次（長岡京跡右京第1145次）調査

図版一



調査地全景（北西から）

井ノ内車塚古墳第9次（長岡京跡右京第1145次）調査

図版三



(1) 横穴式石室玄室側壁の検出状況（北西から）



(2) 横穴式石室玄室側壁の検出状況(北西から)



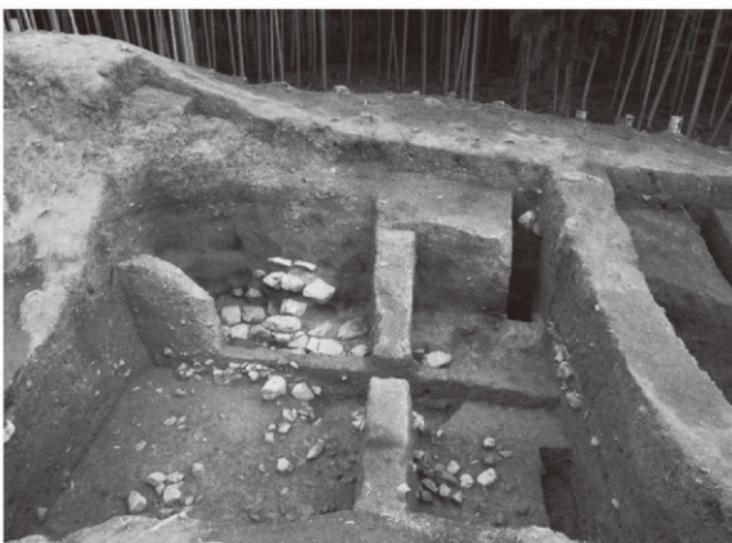
(3) 横穴式石室玄室側壁の検出状況(南東から)

井ノ内車塚古墳第9次（長岡京跡右京第1145次）調査

図版四



(1) 後円部の埴丘盛土（南から）



(2) 後円部の埴丘盛土と玄室側壁（南西から）

井ノ内車塚古墳第9次（長岡京跡右京第 1145 次）調査

図版五



(1) 玄室側壁と掲乱坑の堆積（南西から）



(2) 玄室側壁と掲乱坑の堆積（西から）



(3) 玄室側壁と掲乱坑の堆積（東から）

井ノ内車塚古墳第9次（長岡京跡右京第1145次）調査

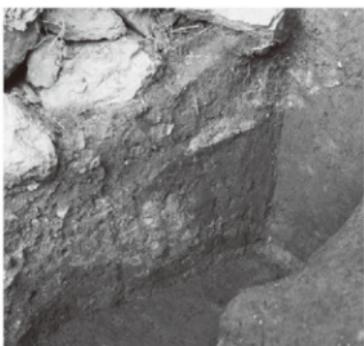
図版六



(1) 石室地業と墳丘盛土-1区（南から）



(2) 石室地業と石材-2区（北から）



(3) 石室地業と墳丘盛土-3区（南から）



(4) 石室地業と墳丘盛土-4区（北から）



(5) 墳丘盛土の状況-3区（西から）



(6) 墳丘盛土の状況-4区（北から）

長岡京跡右京第 1148 次調査

図版七



調査地全景（東から）

長岡京跡右京第 1148 次調査

図版八



(1) 調査区東半遺構検出状況（東から）



(2) 調査区西半遺構検出状況（西から）



(1) 土師器皿群（土器埋納遺構 SX34）出土状況（南東から）



(2) 土師器皿群（土器埋納遺構 SX34）出土状況（東から）

長岡京跡右京第 1148 次調査

図版一〇



(1) 土坑 SK32・SX33 検出状況（北から）



(2) 土坑 SX33 南北断面堆積状況（西から）



(1) 土坑 SK26 (南から)



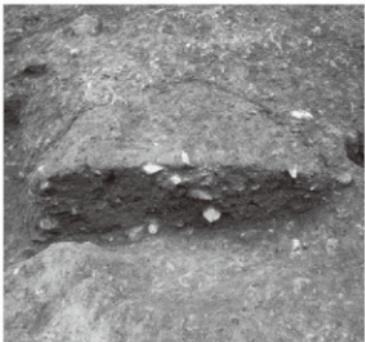
(2) 小穴 P30・土坑 SK31 (東から)



(3) 調査区北東角の堆積状況 (南西から)

長岡京跡右京第 1148 次調査

図版
二



(1) 土坑 SK27 (北から)



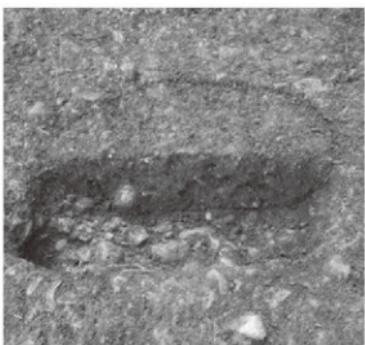
(2) 小穴 P7・8 (南から)



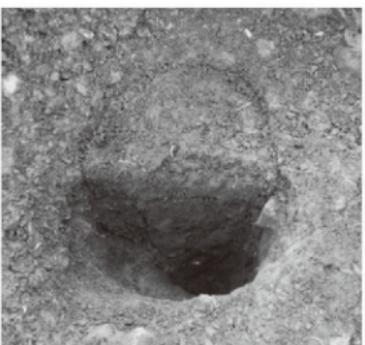
(3) 小穴 P10 (北から)



(4) 小穴 P11・12 (西から)



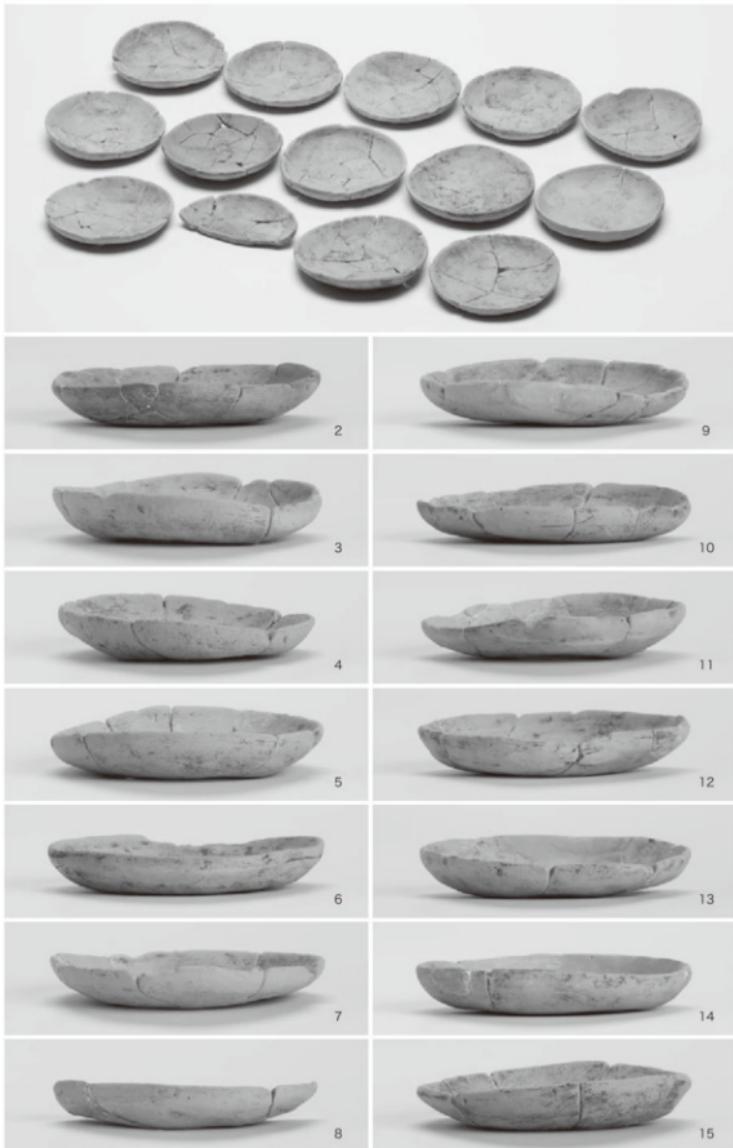
(5) 小穴 P17 (北から)



(6) 小穴 P19 (北から)

長岡京跡右京第 1148 次調査

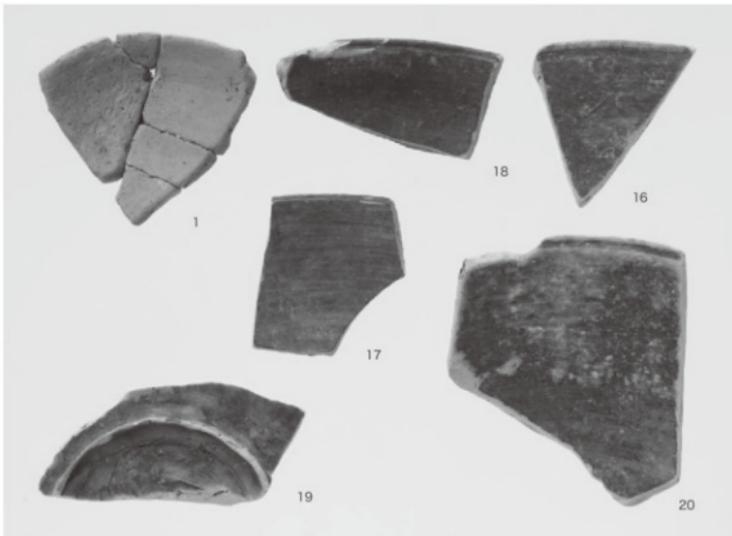
図版一三



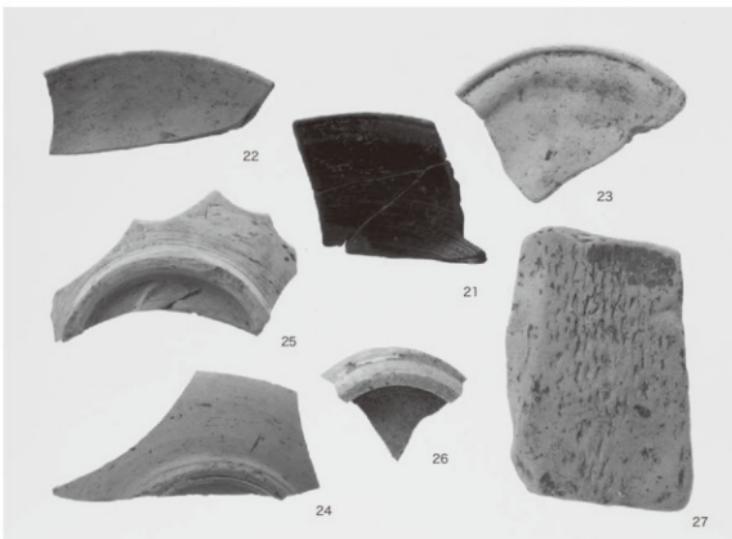
土器埋納遺構 SX34 出土遺物

長岡京跡右京第 1148 次調査

図版一四



(1) 土器埋納遺構 SX34 出土遺物



(2) その他の出土遺物

長岡京市文化財調査報告書 第 70 冊

平成 29 (2017) 年 3 月 25 日 発行

編 集 公益財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒 617 - 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1

電話 075 - 955 - 3622 FAX 075 - 951 - 0427

発 行 長岡京市教育委員会

〒 617 - 0851 京都府長岡京市開田一丁目 1 - 1

電話 075 - 951 - 2121 (代)

印 刷 山代印刷株式会社

〒 602 - 0062 京都府京都市上京区寺之内町通小川西入

宝鏡院東町 588 番地

電話 075 - 441 - 8177 FAX 075 - 441 - 8179

